

男流 文学論

上野千鶴子・小倉千加子・富岡多恵子

筑摩書房

男流 文学 论

上野千鶴子
小倉千加子
富岡多恵子

筑摩書房

上野千鶴子（うえの・ちづこ）

1948年、富山県生まれ。京都大学大学院社会学博士課程修了。現在、京都精華大学助教授。“風を受けて先頭を走る”フェミニズムの旗手。著書に「女という快楽」「資本制と家父長制」「女遊び」「スカートの下の劇場」「〈私〉探しゲーム」などがある。

小倉千加子（おぐら・ちかこ）

1952年、大阪府生まれ。早稲田大学大学院文学研究科博士課程修了、心理学専攻。現在、大阪成蹊女子短期大学教授。骨太で芸達者なフェミニストとして知られる。著書に「セックス神話解体新書」「松田聖子論」「アイドル時代の神話」「女の人生すごろく」などがある。

富岡多恵子（とみおか・たえこ）

1935年、大阪市生まれ。大阪女子大学英文科卒。作家・詩人。作品を通じて性・家族の問題を掘り下げる。著書に「丘に向ってひとは並ぶ」「植物祭」「冥途の家族」「芻狗」「波うつ土地」「逆髪」「水上庭園」など。女性論のエッセイとして「藤の衣に麻の衾」がある。

男流文学論

1992年1月25日 初版第1刷発行

1992年3月20日 初版第3刷発行

著者 上野千鶴子・小倉千加子・富岡多恵子

発行者 関根栄郷

発行所 筑摩書房

東京都台東区蔵前2-6-4（郵便番号 111）

電話 東京 5687-2680（営業部）

5687-2670（編集部）

振替 東京 6-4123

厚徳社・和田製本

ISBN 4-480-82278-X C0095

©C. UENO, C. OGURA, T. TOMIOKA 1992 Printed in Japan

乱丁・落丁本は、お手数ですが、小社読者係宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取替致します。

男流文学論

目次

吉行淳之介

●砂の上の植物群 ●驟雨 ●夕暮まで

『砂の上の植物群』のリアリティのなさは、吉行がしよせん私小説家だからである

昭和三十八年の性の求道者も、いまだきギャルにはフツターの風俗

不必要な仕掛けの多さに、思わず添削しながら読んでしまう

女嫌いの吉行淳之介の、女に関するおびたしい嘘

女の快楽のうめきが、ウーマン・ヘイティングのレベルを深める

吉行の反俗は通俗な小市民のささやかな冒険である

『驟雨』では吉行の一人よがりがよくわかる

『夕暮まで』は、人形使いと人形の、反応の落差のゲームである

こういう小説を読みながら、男は溜飲を下げ、女はその裏をかくための理論武装を準備する

『第三の新人』の市井感覚は卑小なる自我、が体制擁護へとつながる

島尾敏雄

●死の棘

島尾ミホは古代の巫女か、近代の普通の女か？

曖昧さを誠実とかんちがいた島尾敏雄が、ミホを狂気に縛りつける

『死の棘』は、ミホを巻き添えにした、敏雄の病の往還記である

表現と経験の間にあるもの…ミホにとっての『死の棘』の位置

読者を巻き込む文体の力と、日本文学に初めて現われた異形の他者

神か生贄か？ 近代性愛のダブルバインド

愛人VSミホ…進んだ近代性・後れた近代性

愛の殉教者か打算か…上野VS小倉の模擬戦

結論…『死の棘』は、『舞姫』その後、である

谷崎潤一郎 ● 痴人の愛

『』の文体のもついやらしさ

谷崎にははたして「性」が描けているか

カテゴリーとしての女、ベットとしての愛

「三角形の欲望」…他人が欲望するものほど慕わしい…潤一郎と松子

人はどうしてフェミニストになるか

風刺としての『痴人の愛』

谷崎の描く愛欲地獄は怖くない

『己』…谷崎の「マゾヒズム的人格」と裏返し勝利

谷崎が古びない二つの要素…ロマン主義と、倫理観を欠いた世界での性愛の泥沼

小島信夫

●抱擁家族

『抱擁家族』は、ヘアメリカンという記号を抜いても成りたつか？

江藤淳は『成熟と喪失』一冊によって記憶されるべき人である

『成熟と喪失』からもこぼれだす、『抱擁家族』の気持ちの悪い豊かさ

横溢する性的メタファーと、妻・時子に課せられた過度な無残さ

最後のセックスに仕組まれた許しと和解に、半端なグロテスクさを見る

完全な無理解の中でそれでも孤独にならない日本の男女

伊藤整と左川ちか…日本のカミーユ・クロード

批評家の力は、二十年たてば自ずとあらわれる

村上春樹

●ノルウェイの森

ワタナベくんはブラックホール

八〇年代、女のリアリテイ

村上春樹の小説は、作家論より読者論を誘発する

ワタナベくんの「やれやれ」リアリテイ

嵐…「セックス・シーンが多い。やたらと人が死ぬ」

距離をつめないという原罪

「ねえ、聞いて聞いて」コミュニケーションと恋愛の可能性

会話では繰り返しのリズム、地の文のショート・センテンス

関係しあわない時代、関係しあわない恋愛小説

三島由紀夫

●鏡子の家 ●仮面の告白 ●禁色

退屈を描いて退屈させてしまった「鏡子の家」

三島由紀夫が同世代に送ったもの

批評家の自己防衛によって、「仮面の告白」はホモ小説ではなくなった

『宴のあと』の世代と三島由紀夫

新説！ 三島由紀夫は結婚に殺された!?

日本のフーコーは挫折する。時代のホモフォビアが選ばせた「論理的な死」

役に立つ、自分がいとわしい!! 女嫌いの本質

三島の自決に膝がふるえた

肉体と精神の相克が、三島をアンチ・リアリティへと向かわせる

エピソード…悲劇的なるもの

『禁色』と三島のルサンチマン

「非常事態」における性愛…女の好みは力士と美少年に分極する

性に人格や求道を託していた「あの奇妙な時代」の終焉

あとがき

石を投げる 上野千鶴子

花江の悲劇 小倉千加子

批評のアンドロギュヌスへ 富岡多恵子

男流文学論

*この鼎談は、一九八九年十一月から一九九〇年五月まで、全七回の討論を持ち、それをもとに手を入れたものです。敬称は基本的に略させていただきます。

吉行淳之介（一九二四―）

一九二四（大正13）年、新興芸術派の作家・吉行エイスケと美容家の吉行あぐりの長男として岡山市に生まれる。新劇俳優の吉行和子、詩人の吉行理恵は妹。

● 砂の上の植物群

● 驟雨

● 夕暮まで

病気がちで、十六歳のとき腸チフスに罹り、その間に父エイスケ死去。二十歳のとき気管支ゼンソクと診断され、その後も呼吸器系の疾患に悩まされ続ける。東大英文科に進学するが、空襲で家財を失い、アルバイトで窮乏をしのぐも、一九四七年、大学を中退し、新太陽社に入社。以後、六年間大衆雑誌記者をつとめる。若い頃は詩を書いてもいたが、一九四九年、散文としての処女作「薔薇販売人」を発表。その後、「原色の街」をはじめ、何度か芥川賞候補にあり、一九五四年、「驟雨」で芥川賞受賞。いわゆる〈第三の新人〉の一人で、その後の作品に「闇の中の祝祭」「砂の上の植物群」「暗室」（谷崎潤一郎賞受賞）、「夕暮まで」（野間文芸賞受賞）、などがあり、エッセイ・対談の名手としても知られる。

●砂の上の植物群

三十七歳の化粧品セールスマンである伊木一郎は、偶然、口紅を濃く塗ったセーラー服の女子高生と知りあい、その日のうちに関係をもつ。処女だった彼女は、自分に対しては「純潔」を説きながら金で男と寝る姉が許せなかったのだと語り、伊木に、姉を誘惑して「ひどい目に遭わせてくれ」と頼む。伊木は教えられたパーに出かけてゆき、彼女の姉・京子と関係するようになるが、それは、彼女の求めに応じて女を紐で縛って行為をする、といったSM的なものであった。

この話を主軸に、妻を残して死んでいく男が自分の死後妻と関係する男を殺害するために妻自身を兇器にしたとあげるといふ、伊木がとりつかれている推理小説の構想、伊木の人生の随所にあらわれる亡き父親の影、そして、痴漢で捕まった友人お座敷でみせる素人娘のオナニーショーなどのエピソードをはさみながら、「性的退廃とはいったい何か」——複数性交・兄妹姦などについての作者自身の考察や、「砂の上の植物群」と題された絵をはじめとするクレーの作品についての叙述が交錯する。

京子・明子姉妹についての物語は、裸で縛られた京子の姿を妹・明子に目撃させ、その場で妹を組み伏せるといふ展開で一応の終結を見るが、その後、京子が死んだ父親の愛人の娘、つまり異母妹ではないかとの疑問がもちあがり、主人公は近親姦の恐怖に脅えはじめ。結局、京子は妹ではなかったことが明らかになるが、伊木の耳には尚、死んだ父親の聲が響き、彼はそれを強くふり払うのだった。

一九六三年十一月「文学界」に連載。

●驟雨

「遊戯の段階からはみ出しそうな女性関係には、巻き込まれまいと堅く心に鎧を着け」ているために、好んで娼婦の街に通う青年が、一人の娼婦と馴染みになるうちに、次第に心の揺れや波立ちを覚えるようになる過程を描いた作品。

一九五四年二月『文学界』発表、一九五四年芥川賞受賞。

●夕暮まで

「まっ白いウェディングドレスが着たい」ために処女を守り通しているという、二十二歳の江森杉子に興味を覚えた中年男の佐々は、彼女に接近し、次第に彼女の身体を解きほぐしてゆく。しかし彼女はけつして挿入を許そうとせず、指と舌と、そして腿の合わせめにオリブオイルをたらしでの抽送行為という奇妙な関係が一年半続く。やがて杉子のまわりには若い男の影がちらつくようになり、ある日突然、佐々は杉子がすでに処女でなくなっていることに気付く。

その後しばらく連絡がとだえ、若い男と別れたらしい杉子は、再び佐々に抱いてほしいと頼むが、佐々の方にはもう、それに応じる気持ちは失くなっていた――。

一九七六年から七八年にかけて書きつがれた五篇の連作短篇に、六五年、七一年に書かれた二篇の短篇を加筆改稿したものをあわせて、一九七八年に単行本。

▼ 『砂の上の植物群』のリアリティのなさは、

吉行がしょせん私小説作家だからである

▲

富岡 『砂の上の植物群』というのは、その当時のいかにも純文学という感じね。

小倉さん、今までこういう小説をあんまり読んでなかったでしょう？

小倉 吉行を読むのは、はじめてです。

富岡 その小倉さんの初々しい意見からはじめたいわね。

小倉 うーん、読まなきゃいかんと思いつながら読めないんですよ。ぜんぜん読めない。

富岡 読みすすんでいけないっていう意味？

小倉 引き受けた以上、仕事だから読まなきゃいかんって、思うんですけどぜんぜん読めない。

富岡 読めないって、なぜ読めないの？ 不愉快？

小倉 吉行淳之介って、大正十三年生まれでしょう。うちの父親と同じ年なんですよ。

富岡 ああ、そう。

小倉 うちの父親と同世代の人と思って読んでたらね——。

富岡 よけいに何か——。

小倉 うん。父親に成り代わって読んだら腹が立ちます。これが書かれたのが昭和三十八年で、

うちの父親、三十九の時こんなことやってないなあ、かわいそうにと思つて。うちの父親は一生懸命働いてたのに、その前には戦争にも行つて苦労してるのに、この人つてこんなことばかりしてね。それ書いてお金もらつてる。こういうこととして食べてるの、なんか違うつて思うんですよ。

吉行淳之介つて、存在自体が文壇人の典型になつちやつてるでしょ。最近では、渡辺淳一やなんか引き継がれてる文壇人のライフ・スタイル。銀座で飲んで、ホステスくどいて、ホテルでどうしたこうしたつて。別にそれが何なのつて、思いますよ。この人の小説を読むためには、そういうライフ・スタイルに無理矢理、頭を下げなきゃならない。それが苦痛なんです。なのに、何も知らないで、うちの父親は吉行淳之介つていつたら、偉い作家のセンセイだと思つてるでしょう。それは違うんよ、と教えてやりたいです。

それに第一、この主人公、最初定時制高校の先生だったのを、女生徒と噂になつたというんで辞めて、今は化粧品セールスマン。そのへんからやつぱりすごいリアリティがないでしょう。セールスマンがなんで女の人にそんなにお金を使えるのかなつて。

富岡 私も不思議だつた。

上野 でもよくわからないのよ。本当にそのたびに女にお金払つたのか。最後まで金銭的な関係だつたのかどうかもわからないでしょう。^{*1}

富岡 それと、やたらにバーへ出没したりしているでしょ。化粧品のセールスマンつてそんなボロイのかな。

小倉 それに、しょっちゅう欠勤しているでしょう。

上野 おまけに妻子がいるでしょう。

小倉 奥さん働いてないでしょう。庭つきの家に住んでいるでしょう(笑)。

富岡 どうやって暮らしてるのかと思うわね。

上野 ストック・リッチ。父親の遺産があるんじゃないの？^{*}

小倉 そういうとこがずるい。まずそれがカチンと来ましたね。

上野 でも、普通は、生活者のリアリティがないとか生活感覚がないとかという批判は、関西土着くそリアリズムと言われて、そんなの文学批評じゃないって言われるのよ。主人公はいつたいどうやって生活立てているんだらうかとか、そんな非文学的な問いを立てちゃいけないんですよ(笑)。

富岡 ああ、そう(笑)。だけど、私は読みながら――。

小倉 本当に不思議でした。そういう職業の人の、職業パーソナリティっていうのからはずれ過ぎてるから。でも、それ言ったら、非文学的って言われるんですか？

上野 私は設定にはそうこだわらなかつた。まず第一に、この主人公が、ほとんど吉行の分身であるというのがはっきりしているから。主人公の生活は高等遊民的で、ちつともセールスマンのじゃないでしょう。だから、最初の設定は初期の段階で破綻してしまっている。だって読み手はだれも、彼がセールスマンだなんて前提に置きながら読んでないですよ。

富岡 そしたら、どうしてセールスマンという設定にするの？